

雲南省ナシ族母系社会の居住様式と建築技術に関する調査と研究(2)

西南中国民族建築研究会
代表 浅川 滋男

1. 調査と研究の概要

1-1. 第4次調査の目的と経過

昨年度の3度の調査にひきつづき、本年度は雲南省の西北地域で第4次調査をおこなった。昨年度は、西北雲南およびチベットの蔵緬語族全般を対象とし、建築構法・技術に重点をおいた広域的調査を実施したが、本年度は寧蒗彝族自治州の永寧モソ(麼些)人母系社会と小涼山イ(彝)族奴隷社会を対象を限定して、より総合的な視点から住居と集落に関する調査をおこなった。調査の目的は、前報¹⁾でものべたように、西北雲南における蔵緬語族の建築的系譜をさぐるための具体的データをえること、さらに、母系社会や奴隷社会の構造と住居・集落の相関性を読みとることである。

とくに中心となったのは、瀘沽湖畔に線状集落を形成する落水下村でのモソ人母系社会の住居と集落についての調査である。興味深いことに、その南の山側に立地する落水上村はプミ(普米)族の村落であり、この両村が婚姻関係・雇用労働関係などによって、社会基盤の原理を相互に変容させつつあった。

調査期間は1993年7月16日〔出国〕～8月11日〔帰国〕の27日間で、そのうち寧蒗に滞在したのは7月21日～8月3日の14日間である。また、この主要調査の前後も、大理・麗江でペー(白)族およびナシ(納西)族の住居に関する昨年度の補足調査もおこなった。

調査に参加したのは、主査の浅川のほか、江口一久・溝口正人・杉本和樹・高岡えり子・王恵君・何大勇の6委員である。なお、本稿の執筆は、1章と4章を浅川、2章を溝口・高岡・浅川、3章を溝口・浅川が分担した。また、図面は溝口・王・高岡が作成し、言語表記については、江口が監修した。

1-2. 言語表記

今回の調査には、言語学者の江口一久助教授(国立民族学博物館)が同行したため、モソ語・イ語・プミ語の建築関係術語を正確な国際音標文字で採集することができた。これらの諸言語には、それぞれ独自の音韻的(phonemic)表記も考案されているが、各表記法の互換性がまったくなく、民族相互の音声比較が困難であるため、本稿では比較に便利な音声学的(phonetic)表記の利点を重視し、原則として、調査時に採集した国際音標文字をそのまま使うことにした。ただし、hは帯気音(')を示し、声調は省略する。

なお、国際音標文字も一般の読者にとっては非常に難解であり、その音声を解しえないものが少なくない。そこで言語表記のさいには、できるだけカタカナで近似的な音声をするすことにした。ただし、江口以外の委員が採集した語彙には、たんにカタカナでしか表記していないものもある。

表1 調査対象家屋一覧

家屋番号	対象家屋名	配置形式	構造形式	建築年	家族制度	世帯構成員	民族	調査日	所在地
No.9301	麵公房	町家式	穿闘式構造・版築壁・小屋梁木式・切妻瓦葺	民国時代			ナシ族	930720	麗江県新華街32号
No.9302	李近南家	閉鎖中庭式	穿闘式構造・版築壁・小屋梁木式(主屋)・切妻瓦葺	1900頃	父系夫方居住	10人(男6・女4)	ナシ族	930720	麗江県白沙郷玉湖村九社
No.9303	ジャツォ家	開放中庭式	南北棟主屋: 梁木式(柱併用)・小屋組棟持柱+トラス・切妻瓦葺、東西主屋: 棟持柱式・外壁アンペラ・切妻板葺	南北棟主屋1990、東西棟主屋1958	父系夫方居住	9人(男3・女6)	白イ	930722	寧蒗県跑馬坪大二壩村
No.9304	アディン家	開放中庭式	主屋(2棟): 版築壁・キングポストトラス・切妻板葺(西)・切妻瓦葺(東)、草房: 棟持柱式・アンペラ壁・切妻瓦葺	西主屋1964、東主屋1983、草房1988	父系夫方居住	12人(男6・女6)	白イ	930723	寧蒗県牦牛坪紅星村
No.9305	チエ家	開放中庭式	梁木式・切妻瓦葺	1980	父系夫方居住	4人(男3・女1)	白イ	930724	寧蒗県大二地樹囉河村
No.9306	アワ家	開放中庭式	主屋+脇棟: 梁木式・切妻板葺、経堂: 穿闘式構造・版築壁・切妻瓦葺	1960頃	母系アチュ関係	7人(男6・女1)	モソ人	930726~27	寧蒗県永寧郷落水下村
No.9307	ツア家	開放中庭式	梁木式・切妻瓦葺	主屋1982、脇棟1960頃、経堂1930頃	母系アチュ関係	9人(男3・女6)	モソ人	930727~28	寧蒗県永寧郷落水下村
No.9308	コタ家	開放中庭式	主屋+脇棟: 梁木式・切妻板葺、経堂: 穿闘式構造・版築壁・切妻瓦葺	1940頃	母系妻方居住	14人(男6・女8)	プミ族	930729~30	寧蒗県永寧郷落水上村
No.9309	ナズ家	開放中庭式	梁木式・切妻瓦葺	1980頃	母系妻方居住	8人(男3・女5)	プミ族	930731~0801	寧蒗県永寧郷落水上村

2. 永寧落水村の調査

永寧郷落水村は瀘沽湖西岸に位置し、先述のように、モソ人の居住する湖畔の下村と、プミ族の居住する山裾の上村に分かれている。前報でも概説したように、ナン

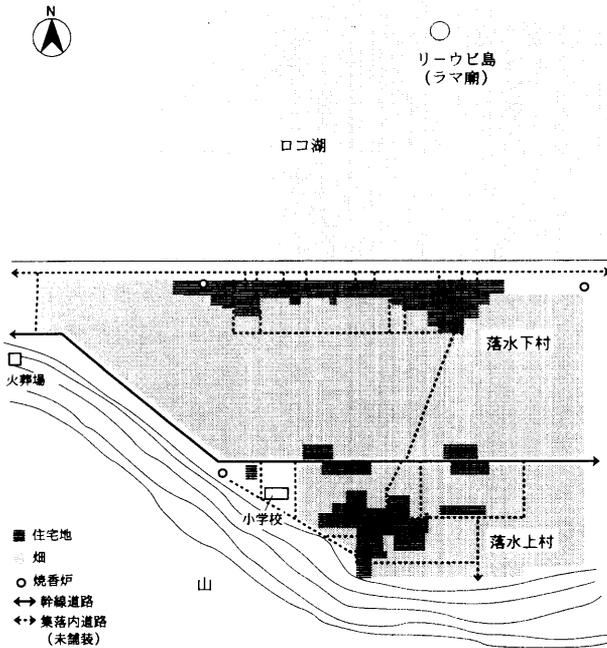


図1 落水上村と下村の配置関係(概念図)

族の東部地方集団であるモソ人は、遅くとも3世紀には四川・雲南の省境地域に定住しており、一方のプミ族は13世紀に元の大理国征討に加担して四川西昌地区からこの地に侵攻し、以後定着した。つまり、同じ「羌」系古遊牧民の末裔であるとはいえ、モソ人はより土着的な古参の集団、プミ族は新参の侵入者なのである。もっとも、後述するように、両者の文化的同化は予想以上に進んでいた。

2-1. 落水下村の構造とモソ人の住まい

(1) 集落の空間構造

落水下村は瀘沽湖畔に沿って線状に展開する集落で、

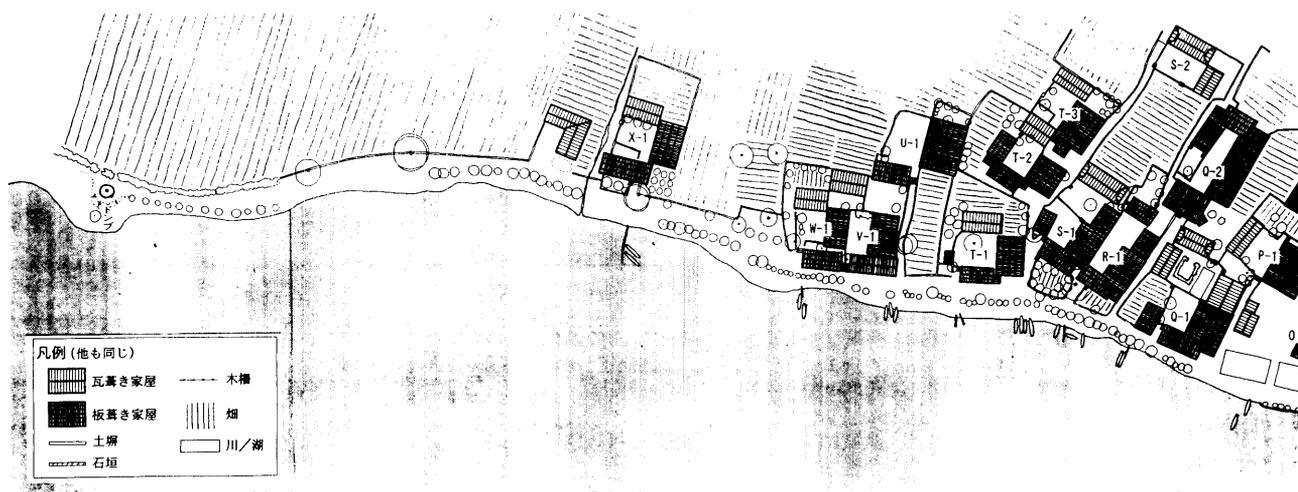


図2 落水下村の家屋配置(屋根伏)図 1/2,500

30戸・225人が住む。集落の東西長は約700m、南北幅は住居1〜3戸が並ぶ程度で、ひろい部分でも約100mである。集落東西端には、新築家屋が多い。各住戸は板葺や松葉葺の堀により区画される。この区画が、居住世帯に対応している。

瀘沽湖は生活用水や水産資源の供給源であり、また風光明媚な景観が観光資源として活用されはじめている。集落も湖畔の道をメインストリートとするばかりか、湖畔そのものをコミュニティ空間とする。線形集落の第1列に並ぶ住居(図2集落図のA-1〜X-1)は、いずれもこの湖畔から直接アクセスする。各住居前の岸边には、飲料水の汲取り・食物洗い・洗濯などに使われる棧橋が設けられ、その近くに、漁に使う船[ズグ zugu]をつないでいる。

集落の背後にあたる南側は、上村および山麓にいたるまで一面に畑がひろがる。作物としては、トウモロコシ、ヒマワリ、ジャガイモなどを植えていた。

村の礼拝施設として、集落の東西両端に伏鉢形の焼香炉[モソ語でドンブ、チベット語ではソーガ]を設けている。東のドンブは、集落の東方150mほどの位置にある。西のドンブは、新築家屋が西側に続々と建設されたため、集落内にとり込まれた格好になっている。もとは、集落の東西両端の境界を表示するシンボルであったものと考えられる。また、各住居の屋敷内にも、ドンブを小形化した焼香炉[スタ sutha]がある。村民は毎朝、どちらかのドンブ、もしくは各家のスタに必ず礼拝するという。ただし、新しい住居には、スタを設けていないものもみられた。

瀘沽湖に浮かぶ里務比島には、ラマ廟(里務比寺)が建っている。文化大革命中に一度とり壊されたが、ごく最近再建された。今は10名ほどの僧が修行しており、周辺からの参拝者でにぎわっている。死者の供養や葬儀がおこなわれるさいには、島から多数のラマがかけつける。火葬をおこなう場所は、集落西方の山裾であり、

墓は山の上にある。

ところで、近年、瀘沽湖の観光開発が進み、村の生活や集落の形態に大きな変化をもたらしつつある。民宿用の施設が屋敷内に建てられ、ラマ経堂も新築される例が少なくない。それらはいずれも、穿闘式構法・版築壁・瓦葺という漢族建築的な構造形式と外観をもつものである。また、湖畔に沿う観光道路を整備する計画があり、すでに国家による事前調査もおこなわれたという。この観光道路が建設されると、屋敷地前方に位置する累木式構造の家畜舎や門屋が撤去され、屋敷地後方に移築されることになり、湖畔の景観はさらに大きな変貌をとげるだろう。

(2) 母系社会の現状

落水下村のモソ社会は、母系の社会である。各家の家長(女主人)は、アマ^{ama}とよばれる。アマとは、ほんらい「お母さん」の意である^(注5)が、小さい子供は自分の母親とともに、家長をもアマとよぶ。ほとんどの事例では最年長の女性がアマであり(22/28例)、アマは主屋の「女の柱」脇のベッドで寝る。ただし、最年長者が存命中に次世代へアマをゆずった事例のうちの半数は、若いアマが脇棟で就寝している(B-1,F-1,L-2)。これは、「アマ」という呼称と就寝場所が必ずしも同時に委譲されるわけではなく、家長権が段階的に移っていくことを暗示している。

モソの母系社会では、婚姻関係というものが存在しない。男女関係としては、「妻問」の関係があるにすぎない。男はだいたい20代で恋愛をはじめ、女の合意のもとに、彼女の部屋に通うようになる。女は13歳になると、民族衣装を着て正月の踊りに参加するようになり、男性をうけ入れることができる。男が女の部屋に忍びこみ、妻問の関係が成立した段階で、この男女は互いにアチュとよびあう仲になる。アチュとは、「友達」もしくは「愛人」を意味する^(注6)。

このような男女関係を、中国民族学では一般に「阿注

婚」と称するが、妻問によるカップルは「夫婦」という社会・経済単位ではけっしてなく、「愛人」関係にすぎないのだから、厳密にいうならば、「婚」という用語を使うべきではなかろう。アチュ関係の生じた男女は、その関係にもかかわらず、原則として、いずれも母親の親族集団に帰属して、新たな社会的単位を形成することがない。くりかえすけれども、これがモソ母系社会の原理であり、本稿では「アチュ婚」ではなく、「アチュ関係」という用語で、以下の議論を進めていきたい。

さて、このアチュ関係についての調査が、難渋をきわめた。当然のことながら、とくに女性にとってアチュのことは、きわめてデリケートな問題だからである。女性にアチュがいるかどうか、それが誰であるのかを公言することはタブーとされる^(注7)。しかしながら実際には、どの女性のアチュが誰であるかについては、村中の人が感知している。このため、ひとりの男性(または女性)が、次から次へとアチュをとりかえるのは現実には困難である。しかし、それでも、アチュ関係は「婚姻関係」とは違う。アチュ関係が必ずしも「永続性」をとまなわないからこそ、女たちは自分のアチュを知られることを恐れるのである。これについて、ある村人は、つぎのように語った。35歳をすぎた女性には、それまで親しかった男性アチュが通ってこなくなり、別の若い女性とアチュ関係をもつようになる場合がある。女たちがアチュの存在を公言しないのは、このようなアチュとの離別が、関係の前提として念頭にあるからともいえよう。

一方、男性は、少なくとも若いうちは、女性アチュや子供の住む家ではなく、自分が生まれ育った家に帰属すると考えているようである。たとえば、R-1+S-2の家族の多くは、今年新築されたS-2に住んでいるが、アマとともにR-1に住む長男(△24)は、「代々の家を守るために」自分は古いR-1に残っている、とのべた。

図3の一覧表は、「この住まいの家族にはどのような人がいますか」という各戸への質問の回答を、模式的に

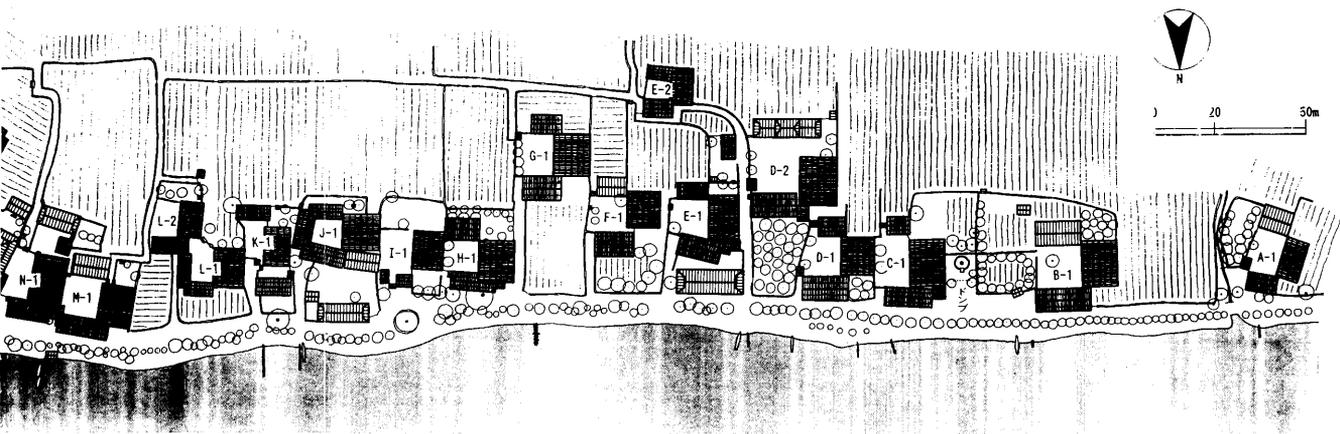


図2 (続き)

あらわしたものである。男性アチュについては、一覧表に示したように、△=同居、▲=妻問、▼=不明^{(1)(*)}という3段階の回答がえられた。このような差異は、男性アチュと女性側家族の^{がわ}関係の違いを反映している。たとえば、子供のいない女性でアチュの存在をみとめた例はまったくない。女性側の家族にとって、通ってくる男性を同居人もしくはアチュとしてみとめるには、少なくとも子供を産ませた実績が必要なることがわかる。

一方、男女のカップルが同居している例は12例ある。そのうち5例は、娘がいないため、息子が跡継ぎのアマとなるべき嫁をめとったケースである（父系社会における婿養子の反転した例）。また、残りの7例のうち、5例の男性アチュが高齢（40代以上）であることに注目したい。若いアチュにとっては、帰属意識としての「家」と物理的な「家」が一致しているのに対し、高齢のアチュは、自分の出自する「家」での居場所がなくなり、それへの帰属意識が徐々に希薄になっていくようである。下村のデータをみるかぎり、生家のアマが^{めい}姪（姉妹の子供）の代になった時、姪の家族と同居している例はまったくない。この事実から、男は年齢とともに、生まれ育った家よりも、女性アチュ（あるいはその娘）の家のほうが、物理的にも意識の上でも近い関係になっていくことが読みとれる。調査時に、調査家屋S-1 (No.9307)

では、亡くなった男性アチュ（老人）の葬式が、女性側の家でおこなわれていた。この事実からも、上の推定を裏づける。

(3) モソ人の住まい

下村で住居 [ズクアzukhua] と家族 [アワawo] の調査を総合的におこなったのは、以下の2戸である^(注9)。

No.9306 アワ家 集落西寄りに位置するアワ家は、女主人のアワ・ノズ(Awa Nozi:42歳)とその息子、さらに彼女の養父とその息子の計7人が同居する。この養父は、死んだ母のアチュの兄弟らしく、母系の同居原理からはまったく逸脱した特殊例といえよう。

住居は、中庭 [ハダhadu] を中心に西に主屋、北に2階建の脇屋と家畜舎、南にラマ経堂が配列される。これらの建物は30年ほど前に建てられたという。大工は上村のジャガ・ピソ（プミ族、調査家屋No.9309に居住）である。スタは主屋の南に置く。

主屋は切妻平入りで、累木式の主室の四方に付属室を配した構成である。主室と北脇間は累木式構造、前室は穿闘式構造、南脇間と後室は穿闘式・版築壁併用構造とする。主室は「男の柱」[ハ^パパ^パ patçitumi] と「女の柱」[ミズトミ mizutumi] の筋で、南側の土間と北側の板間に分けられる。しかし、南北方向の空間分節としては、むしろ「下の炉」北縁を東西に通る敷居が境界とし

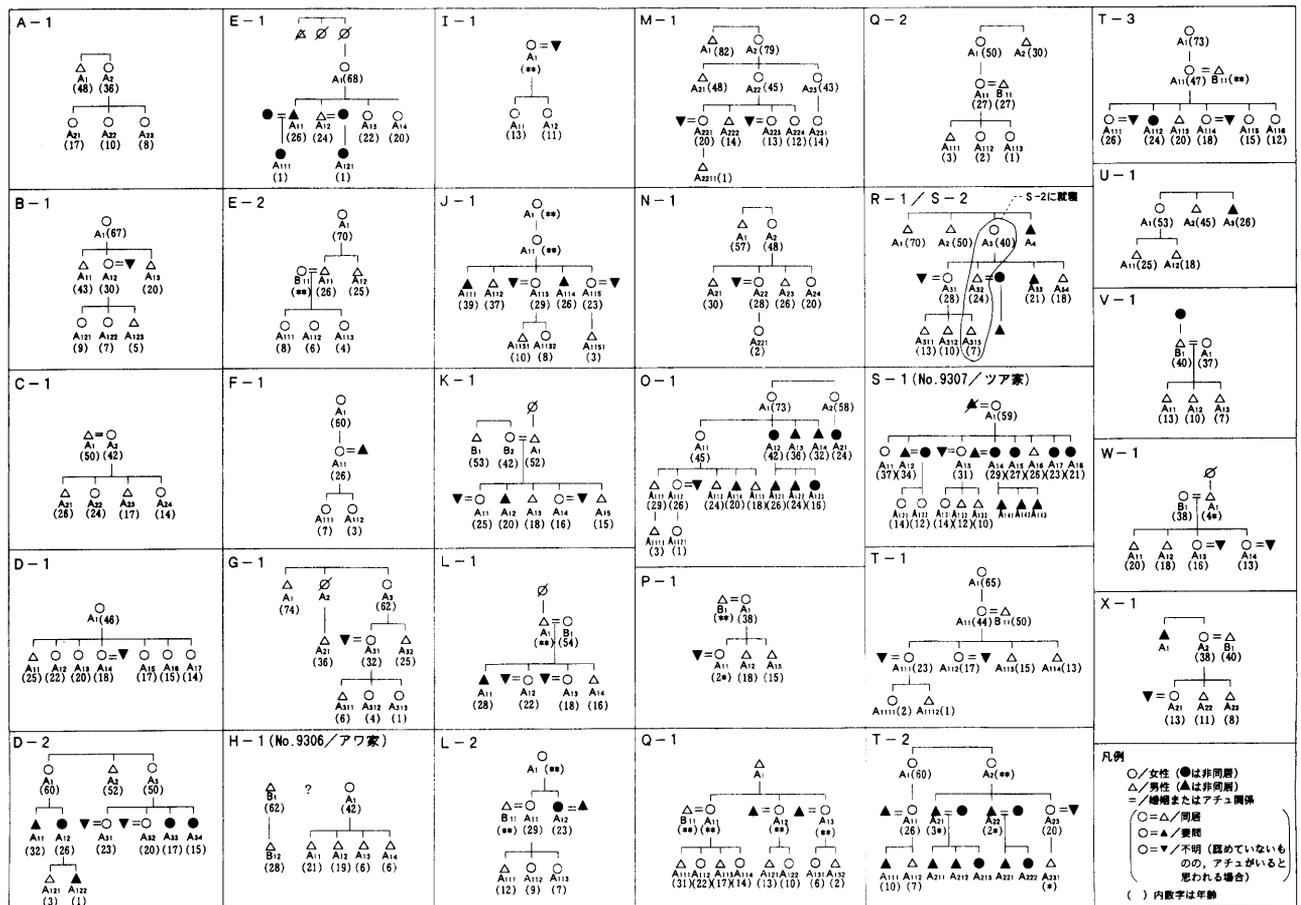
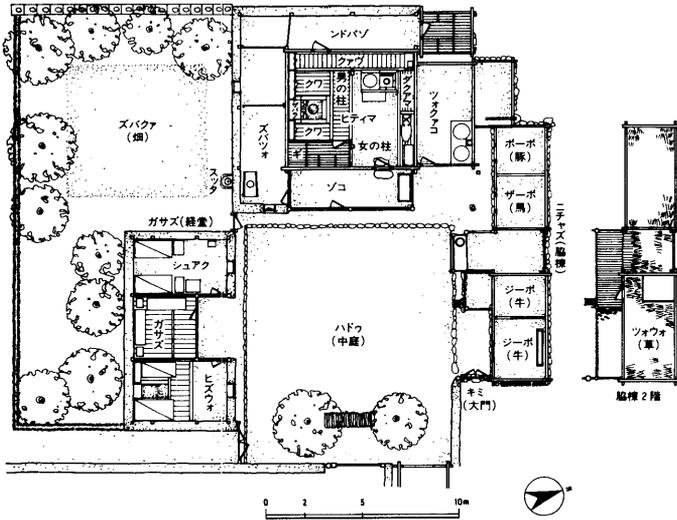


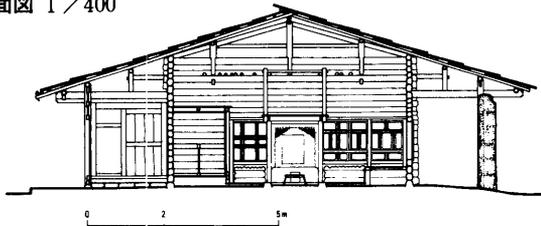
図3 落水下村（モソ人）の世帯構成一覧

て重要であり、この敷居の北側の板間と土間をあわせた領域を、ヒティマhitimaとよんでいる。

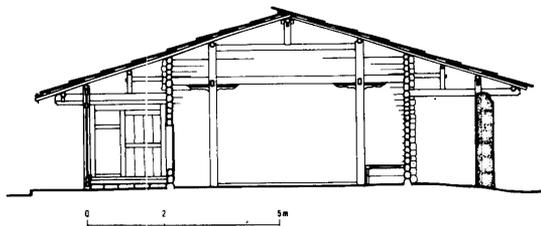
「下の炉」はマザクア mezakuaといい、その東西の着座領域をガクワgakuaとよぶ。前報でものべたように、「男の柱」側のガクワが男と客人、「女の柱」側のガクワが女と家人の着座領域とする規範がある。一般的には、女側の壁際に女主人のための寝台 [ズウォ zuwo] を置くが、この家ではそこに穀物貯蔵の大きな櫃 [キ gi] を置いている。女主人は末子とともに西側の縁台 [クアブ kuabv] に



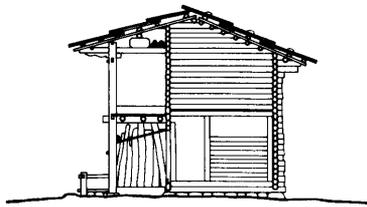
平面図 1/400



主屋断面図 (妻壁部分) 1/200



主屋断面図 (中間柱筋) 1/200



脇棟断面図 1/200

図4 アワ家 (No. 9306) の実測図

寝るといい、居住集団とともに空間利用にも「文法」からの逸脱がみとめられる。

「下の炉」の正面には、ラマ教の火神ザバラ zabala をまつる祭壇と塑像を設ける。昨年調査したソナミ家のような神格化した竈はともなわない。ザバラの両脇には、戸棚 [スウスウ] を作りつけにしている。土間側の「上の炉」はクアウオクア kuawokua といい、炉と竈を併設し、西側の縁台から火を調節する。東側には俎板ともなる大きな配膳台 [サ sa] を置く。「上の炉」も祭壇をともなうが、それは縁台の西北隅に置いた戸棚兼用の神棚である。この縁台がのる北側の縁台はダクアマ dakuama といい、ほかには豚の薫製・瓶・調味料・食器棚などがのっていた。

前室 [ゾコ dzoko] は、中庭からアクセスする玄関部分で、北端に水槽 [ジグ dzigu] を置く。脇間はいずれも土間の作業場であり、北脇間 [ツォクツォク] には家畜飼料を煮込むための大竈 [ハツクア hatsokua]、南脇間 [ズバツォ zubatso] には大きな擦臼 [ツラ tsula] が置かれている。後室 [トパゾ ndopadzo] はほとんど空き部屋だが、北端に穀物倉庫 [トパギ ndopagi] の開口部が接している。

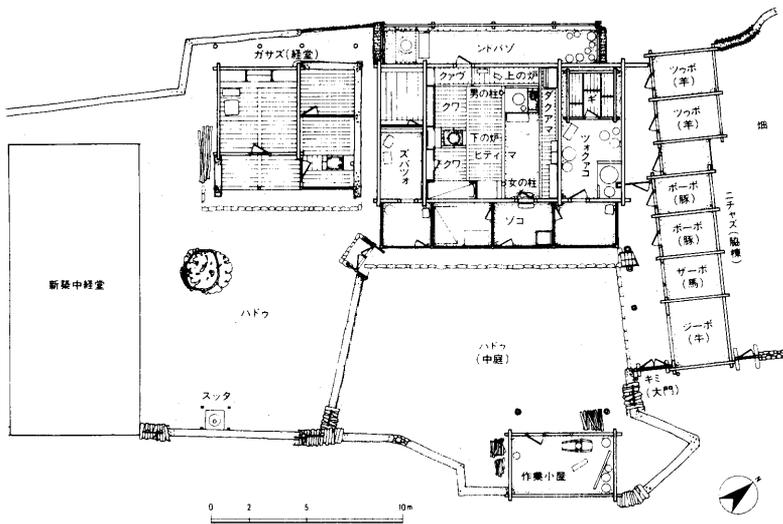
主屋と直交する北側の脇棟 [ニチズ nitczu] は、2階建の累木式家屋を2棟連結したもので、1階は家畜舎、2階は干草・稲藁の貯蔵室とし、さらにその東端に大門 [キ kimi] を置く。一方、南側の脇棟はラマ経堂 [ガサズ ga4adzu] で、穿闘式構法と版築壁をもつ平屋建築である。平面は3室構成で、中央間を経堂とし、炉を切る東脇間 [ヒズウォ hizuwu] を長男と次男の寝室、西脇間 [ファク xuaku] を養父その他の寝室とする。

No.9307 ツア家 ツア家は、集落の中央東寄りに位置する。女主人のツア・ツリ (59歳) には、子供が6女2男いるが、現在は長女とその子供、次女とその子供、次男の計9人がツリとともに住む。長男と3女は結婚して、上村に住んでいる。

屋敷は、主屋を中心とする区画と、ラマ経堂の区画の2つのブロックからなる。前のブロックでは、中庭を中心として西に主屋、北に2階建の脇棟、東に作業小屋が建つ。塀で画された奥のブロックでは、主屋と同じ筋に平屋のラマ経堂があり、その南西に経堂兼民宿用施設を新築中である。脇棟の北側と新築経堂の南側には畑が付属する。主屋と作業小屋は1982年の建造、脇棟とラマ経堂は60年以上前の建造 (ツリの3代前) という。

主屋は、他の調査例と同様、累木式壁構造の主室の四方に付属室を配した平面をもつ。アワ家と異なるのは、南北の脇間と主室を一体の累木式構造とするところ、そして穀物倉庫を北側の脇間のなかに置いていることなどである。主室のベッドには、ツリと次女の末子が寝る。

脇棟は累木式構造の2階建だが、前面の走廊部分のみ穿闘式構造とする。1階の4室は家畜小屋、2階は3室



1階平面図 1/400

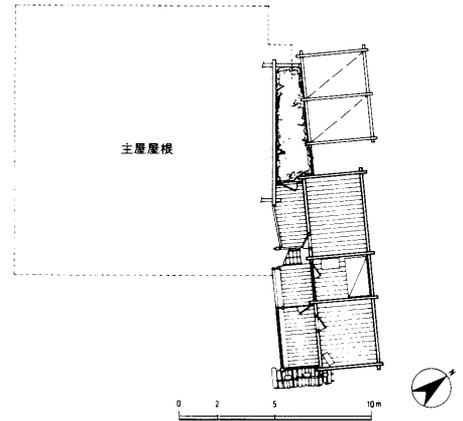
図5 ツア家 (No. 9307) の実測図

に区切られ、中央間を次女とその子供の寝室、残りを倉庫とする。作業小屋は累木式構造の平屋建築で、内部は1室空間とする。

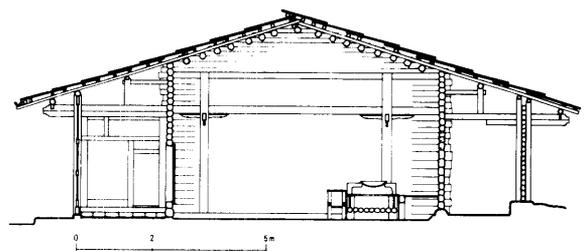
ラマ経堂も平屋建築で、平面は経堂・北脇間・走廊からなる変則的な構成をもつ。構造は経堂が累木式だが、脇間や走廊は版築壁構造とする。経堂は累木式の壁体に土を塗りごめ、壁画を描く。また、経堂の入口の扉枠にはチベット風の線彫刻を施す。脇間はラマ僧の寝室であり(ただし現在ラマはいない)、炉が切られる。累木式構法を用いてつくられた経堂の数少ない遺構であり、古式のラマ経堂として注目すべきだろう。南に新築中の民宿は、穿闘式構法・版築壁の漢族の建築である。2階に経堂を設け、その他の室は民宿としても使用する予定という。現在は長女母子が寝る。スタは奥のブロックの東塀の前にある。

さて、7月28日にこの住まいの実測調査をはじめたところ、じつは数日前に年老いた男性アチュが亡くなったばかりであることがわかった。しかも、その死体は、主屋後室に安置されて土のマウンドで覆われ、それを前面の白いカーテンで隠していた。いわゆる仮殮の状態であったのである。その翌日、輿状の棺をつくるために、上村のプミ族大工がやってきて、中庭で家人とともにその製作をはじめた。また、時おりラマがやってきて、経堂で読経していた。

7月31日に通夜がおこなわれた。多くのラマが参集し、経堂で読経するだけでなく、主屋主室でも2人のラマが読経する。村人も昼夜をとわず、この家を訪れてお供え物をし、家人は客に酒やご馳走を振舞う。供え物は「下の炉」ではなく、「上の炉」に次々と供えられ、その南側の縁台にラマが座って、天井からつるされたシンバルや太鼓をたたきながら、読経する。この場合、「下の炉」も「上の炉」も、調理に用いられることはない。それは、あくまで祭壇として機能している。さまざまな



2階平面図 1/400



主屋断面図 1/200

ご馳走をつくるのは、北脇間に置かれた大竈(日常的には家畜用)である。通夜のさいの空間利用としてもうひとつ注目したいのは、主屋対面の作業小屋が音楽室に変わることである。この小屋のなかで吹かれる笛やラッパの音が、葬儀の雰囲気を大きくもりあげるのである。

葬儀は、翌日の早朝おこなわれた¹⁰⁰⁾。

2-2. 落水上村の構造とプミ族の住まい

(1) 集落の空間構造

落水上村は、山から湖にむかって北下りの斜面に形成されたプミ族の集落である。下村と異なり、数戸のまとまりをもつ住居群が面的に展開し、その間に畑を配する。西の山際に流水があり、そこから集落内に水がひかれる。焼香炉は、集落から離れた西方にある。

(2) プミ族の住まい

上村のプミ族住居は、下村のモソ人の住居とそっくり同じ造りをもつ。おそらく新参者であるプミのほうが、先住民であるモソの建築技術を受容したのだろう¹⁰⁰⁾。興味深いことに、観光開発による現代化が下村で進行しはじめており、住居の平面や火神などの要素は、上村のほうがよく古式を残している。また、ほんらいプミ族の社会は、一夫一妻制を軸にした父系社会といわれるが、上村の場合、下村のモソ母系社会の影響を露骨にうけており、「一夫一妻」という概念は存続しているものの、婿取り婚を基盤とした母系社会に変質しているように思われた。なお、集落に1戸だけある漢族の住宅も、プミやモソとまったく同じ形式である。

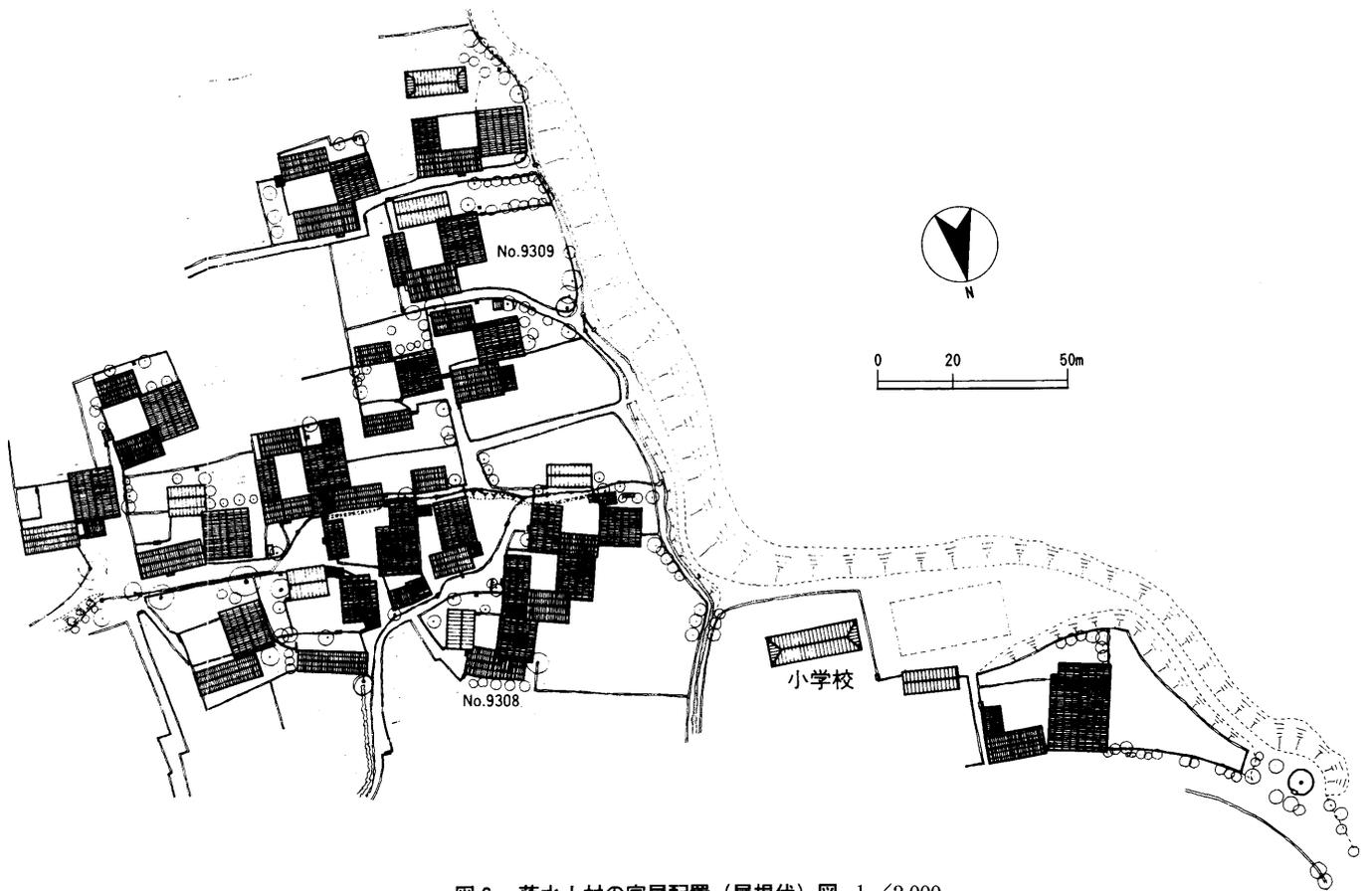
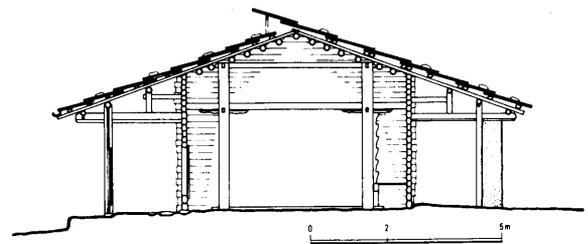


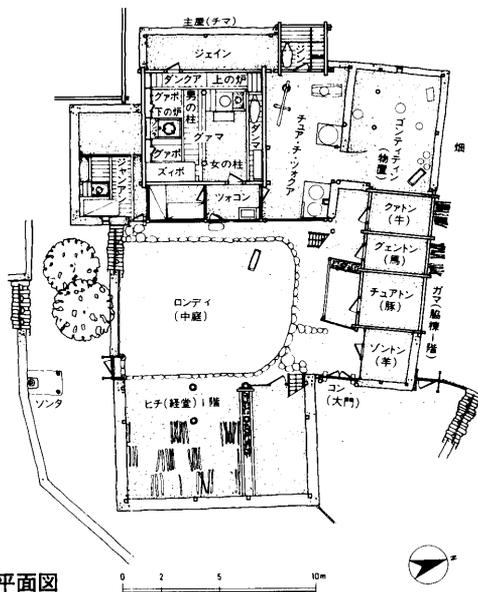
図6 落水村の家屋配置(屋根伏)図 1/2,000

No.9308 コタ家 コタ(Kotha)家は、集落中央部北寄りに位置する。モソの男性を夫を迎えたプミ族の拡大家族 [t̥t̥chi] で、あわせて14人のメンバーがいる。住居 [ジマ dzima] は中庭 [ロンディ lōdi] を中心に、西に主屋 [マ tcima]、北に脇棟、東にラマ経堂が配列される。焼香炉 [ソタ sogtha] は、敷地南端の塀沿いにある。

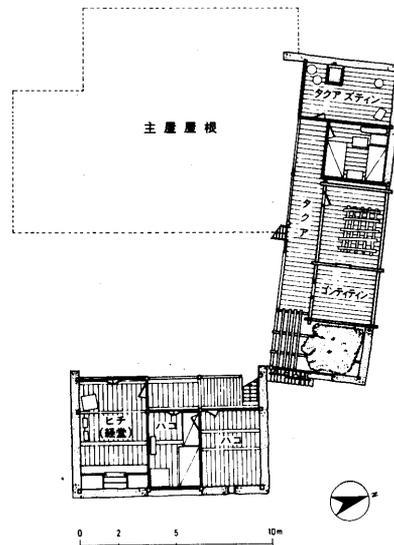
主屋は、モソ人の住居と同様、累木式の主室を中心に、四方に室を付加した形式である。主室はやはり「男の柱」 [パトウシアタ phatv̥ciata] と「女の柱」 [マタダシアタ



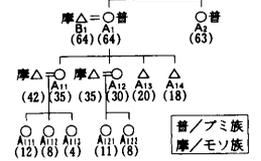
主屋断面図 (1/200)



1階平面図
1/400



2階平面図 1/400



世帯構成図

図7 コタ家 (No. 9308) の実測図

mhadaçiata] の筋を境にして、北側を土間、南側を板間とする。しかし、モソと同様、空間分節として重要なのは、「下の炉」の北端に接する敷居で、この北側の板間と土間の領域をあわせてグァマ guama とよぶ。一方、「下の炉」はたんにクア kua といい、その両脇の着座領域はグァボ guapho という。ラマ教の火神はゾンバラ zombala、その両脇の作りつけの戸棚はスト swtho とよばれる。

「女の柱」の東奥の板間上には、長櫃状の穀物庫 [ズィボ dzibo] を置くが、これは No.9306 のモソ住居と同じで、いささか規範から逸脱している。「上の炉」はツォクア tsokua、その西側の縁台はダンクア dankhua、北側の縁台はダンマ danma という。このダンクアで、家長のウルツェヅマ (○64) と彼女の孫娘 (長女の長女：○12) が寝ている。

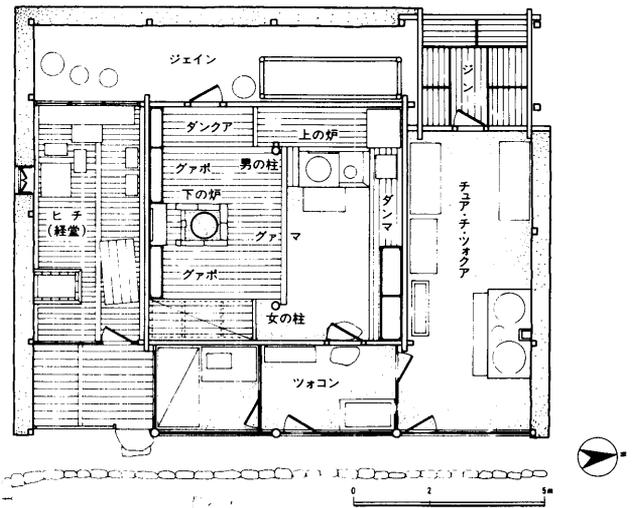
主屋の前室はツォコン tsokon といい、2室に分かれる。玄関口を設けた南室に水槽 [トツォ də tsə] が置かれ、北室は女主人の妹 (○63) の寝室としている。版築壁でかこまれた南脇間もやはり2室に分けられ、東室を女主人の夫 (△64) の寝室 [ジャンツァ tsāā]、西室を土間の物置とする。東室は炉や火神を設けて、主室の板間を縮小したような空間をつくっている。

主屋の後室 [ジェイン dzeig] は、やはり版築壁にかこまれているが、ほとんど使用されている形跡がなかった。北側の脇間は、脇棟との余白空間を利用したもので、チュア・チ・ツォクァ tshua tchi tsoka という。このプミ語は「豚の食べる竈」を意味し、その名のとおり、大きな竈が2つ置いてある。このほか、擦臼 [ロツァ loŋtha] や踏臼 [fɰtɰi] もこの部屋にあり、累木式構造の穀物倉庫 [ジィボ dzibo] の開口部も、後室ではなく、この脇間にむかって開いている。なお、主屋の建築年代は不詳だが、家長が幼少のころにはすでに建っていたといい、民国時代の作品である可能性が大きい。

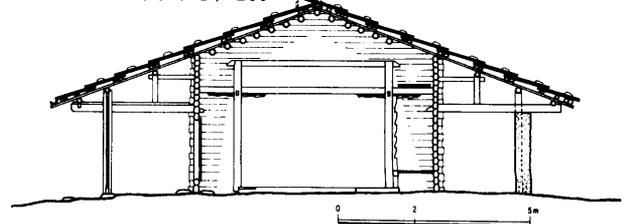
北側の脇棟 [ニツァイ tɰitsaitɰi] は中央部分を累木式、東西端と中庭側走廊を穿闘式木造構法・版築壁併用とする2階建建築である。1階は家畜舎 [ガマ gama] と物置 [ゴンティン gontitig] にあて、東妻壁に大門 [コン kon] を置く。牛舎はクアトン kuaton、豚舎はチュアトン tsuaton、羊舎はゾントン zōntonŋ、馬厩はグエトン gueton という。2階 [タア thakua] は前面を走廊とし、後面は西寄り第1室が長女親子 (婿入りした夫をふくむ)、第2室が次女親子 (同左) の寝室 [タアズティン thakua ziti]、東半部を物置とする。

ラマ経堂 [ヒチ hitɰi] は、穿闘式構造・版築壁の2階建建築である。1階は家畜舎と物置、3室構成の2階は南室を仏堂とし、中央室を長男と次男の寝室、北室を客間 (寝室) とする。仏堂はやはりヒチといい、それ以外の寝室はハコ hako という。

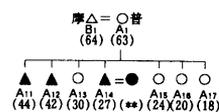
No.9309 ナズ家 ナズ家は、集落南寄りに位置する。プミ族の女主人ダシュイハム (○63) を中心に、モソ人



主屋・経堂平面図 1/200



主屋断面図 1/200



世帯構成図

図8 ナズ家 (No. 9309) の実測図

の夫 (大工、△76) と娘親子などの計8人が住む。興味深いのは、2人の男児をもつ長女 (○30) が「夫」の存在を公言しなかったこと、そして同居する家長の子供がいずれも女性で、男性はいずれも家を出ていることである。つまり、ナズ家の家族構成は、コタ家以上にモソ社会に近いといえよう。

住居は、中庭を中心にして、西に主屋、北と東に付属舎が建てられている。これらはいずれも板葺である。主屋と北の脇棟は十数年前、東の脇棟は6~7年前の建造という。南の1段あがった敷地には、ラマ経堂 (民宿兼用) を新築中である。焼香炉は主屋の南にある。主屋は、他の調査家屋と同様、累木式の主室を中心にして、四方に室を付加した平面をもつ。主室も前例とほぼ同じ構成だが、わずかに異なる点としては、

- ① 「男の柱」と「女の柱」が板間のカサ櫃上ではなく、その内側に位置すること。
- ② 板間東南部分の長櫃状の穀物庫が、ベッドとしても

使用されていること。
などがあげられる。

最も注目したいのは、版築壁にかこまれた南脇間をラマ経堂としているところである。全体を板張りにして炉を切り、祭壇を西壁沿いに設けている。

北側の脇棟は、前面を走廊とする累木式2階建の建築である。1階は家畜舎、2階は寝室とする。東の脇棟は穿闘式構法・版築壁の2階建で、ナズ家唯一の瓦葺建築である。やはり1階を家畜舎、2階を寝室とする。

2-3. 建築構法と部材名称

(1) 主屋断面にみる構法の類型

以上、おもに平面構成を中心にして、落水村のモソ人とプミ族の住まいを個別的に描写してきたが、つぎに、両者の建築構法を、住まいの中核的施設である主屋を対象にして典型的に整理してみたい。

主屋の構造を、横断面からとらえると、累木式壁構造の主室と穿闘式構法の前室・後室が一体化したものとすることができる。前室および後室では、繋ぎの横材(貫)を主室壁体の横木間に差し込む。この場合、横木に浅い納穴をあけるものが多い。

主室を妻壁の小屋組形式からみると、

I. 壁体をそのまま立ち上げて累木式とするもの

II. 東と又首状の斜材を用いた構造とするもの

に大別できる。ツア家 (No.9307)、コタ家 (No.9308)、ナズ家 (No.9309) が I 式、アワ家 (No.9306) と昨年調査した永寧行政村のソナミ家 (No.8) が II 式の小屋組をもつ例である。落水村では、II 式と同系統の小屋組が、比較的新しい付属屋によく採用されていた。この点からみると、I 式が古式で、II 式はいくぶん新しい手法といつてよいかもしれない。なお、母屋桁は、累木式である I 式の場合、横木1段ごとに架けられるが、II 式の場合は東の上のり、I 式ほどピッチが密にならない。

一方、「男の柱」と「女の柱」の筋でも、構法に若干

の差異がみとめられる。柱頭に貫状の梁をわたすだけでなく、その1mほど下に貫を通して2重梁風にし、さらにこの貫の下に背違いにして桁行方向にも貫を通して、いずれの材も累木壁とつなぎ軸部を固めている。この場合、柱頭の梁材が、

A. 累木壁上端よりも高い位置にあって、母屋桁を支えるもの

B. 累木式壁の上端で止まるもの

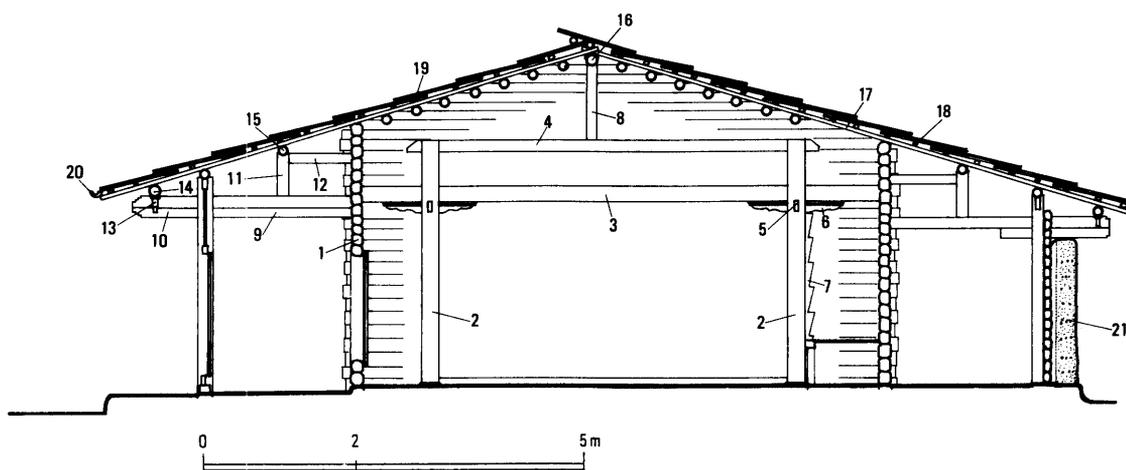
の両種がある。アワ家 (No.9306) とコタ家 (No.9308) が A 式、ツア家 (No.9307)、ナズ家 (No.9309)、ンダパ家 (下村 Q-1) が B 式的具体例であり、村全体では後者のほうが多くみられた。また、アワ家やンダパ家では梁の中央に棟束を立てるが、この種の例は多くない。以上の点からみて、「男の柱」と「女の柱」をつなぐ架構には、屋根荷重を支える小屋組としての役割がさほど期待されていないことがわかる。つまり、軸部を固めることが、この部分の主要な構造的機能とみなせるだろう。さらに極端な言い方をすれば、「男の柱」と「女の柱」にはほとんど構造的な意味がなく、主室の空間構成を規定する象徴的な存在でしかないのかもしれない。

なお、同じ大工(ジャガ・ピソ)の手になる作品でも、アワ家とナズ家のように、異なる小屋組を採用するケースがあることに注目したい。また、I 式・II 式と A 式・B 式に対応関係がみとめられないことにも、注意すべきである。

(2) 部材呼称 —モソとプミの比較—

ナズ家 (No.9309) の入婿であるジャガ・ピソは、アワ家 (No.9306) も建てたモソ人の大工であり、落水村において、多くの家屋の建造に携わってきた。76歳になるピソは、30歳から大工の見習いをはじめ、経験を積んで棟梁になったという。今回の調査では、ピソ棟梁をインフォーマントにして、モソ語とプミ語の建築部材呼称の聞き取りをおこなった。

以下では、図9を参照しながら、



モソ語/プミ語

- ① kzedo/lo
- ② tōmie/tāg
- ③ liāg mie/liāg me
- ④ kusuphi/dōg dʒapō
- ⑤ zupha/tvtv
- ⑥ tēpa/ledʒu
- ⑦ dʒa/dʒa
- ⑧ wadzo/wazo
- ⑨ liādzō/liāg
- ⑩ liānʒito/liāg
- ⑪ wadzo/wazo
- ⑫ wakua/wakv
- ⑬ zu xə/zu pha
- ⑭ zuwv/dogle
- ⑮ zula/dogle
- ⑯ kusuphi/dogbvle
- ⑰ xakhabomi/xakhiabumi
- ⑱ dʒatog/dʒato
- ⑲ dʒitshu/xakhia
- ⑳ mabv/mābv
- ㉑ gupha/gupha
- ㉒ dʒobo/dʒobo

図9 部材呼称説明図 [ンダパ家の断面図をベースにしてつくる] 1/100

(図9 部材番号) モソ語の呼称/プミ語の呼称の順に解説していきたい。なお、記載が繁雑になりすぎるので、カタカナの近似音声表記は省略する。

主室累木壁の横木は、① *kædo/lo* という。柱の総称は② *tōmie/tāŋ* で、「男の柱」と「女の柱」をつなぐ梁行方向の貫を③ *liaŋ mie/liaŋ me*、それを支持する線形つきの肘木は④ *ɬepa/ledzu* という。柱頭にのる梁は④ *kus uphi/dōŋ dʒapō*、桁行方向の貫は⑤ *zupha/tvtv* とよぶ。刻み梯子⑦ *dʒə/dʒai* は、「男の柱」にとりつけられている。梁の中央にのる棟束は、呼称が⑥ *wadzo/wazo* で類似するが、既述のように、あまり多くはみられない。

前室の穿闘式架構のうち、下段の貫は木材を上下に重ねた合せ材で、⑨ *liādzo/liaŋ* という。これが軒先に突きでた部分は、プミ語のみ音声が変わり、⑩ *lianpito/liaŋ* となる。⑨の上ののる束は⑪ *wadzo/wazo*、上段の貫は⑫ *wakua/wakv* という。後室の構造もほぼ前室に準ずるが、⑭ *dʒobo/dʒobo* という版築壁にかこまれる。

⑩の貫の先端には軒桁⑬ *zu lv/dōŋ le* をわたし、その下には桁行方向に貫⑬ *zu xə/zupha* を通す。母屋桁は⑮ *zule/dōŋ le*、棟木は⑯ *kus uphi/dōŋ bvle* という。垂木⑰には2種あり、普通の垂木を *xakhabomi/xakhiabumi*、いくぶん径の太い材に木舞(⑱ *dʒitshu/xakhia*)をおさめる切欠きをつかった材を *dʒatoŋ/dʒato* という。後者の数は少なく、前者4~5本ごとに後者が1本配列される。なお、垂木はすべて引掛垂木である。垂木の先端にとりつけられる樋は、⑲ *mabv/mabv* という。屋根は *gabi/tixo* といい、板の葺材は⑳ *gupha/gupha* で共通している。

以上みたように、モソ語とプミ語の建築関係語彙は、まったく同じ音声、もしくは比較的近似する音声をもつものが多いが、同時に完全に異なる語彙も少なくない。この事実からも、両民族の建築的出自が異なりながら、相互に影響をおよぼしあってきたプロセスを推定することができよう。

3. 小涼山イ族の集落と住まい

3-1. 小涼山イ族の奴隷制

雲南・四川にまたがる大涼山・小涼山地域のイ族は、奴隷制の遺存する民族として有名である。もちろん解放後の新中国は奴隷制の存続をみとめてはいないが、それは表向きの話で、現実には非常に複雑なカーストが継承されてきている。

寧蒗県の大平地行政村樹囉河自然村での聞き取り^[12]では、階級はまず大きく、支配層の黒イ [ʎno]、被支配層平民の白イ [ズィ dʒi]、さらに家をもたない奴隷 [トホ thuho] に分けられるという。さらに、各階層はつぎのように細分化されている。

- (1) 黒イ ① ヴァチャ *vatʂa*
 ② ロホ *loho*
 ③ ルウ *luu*
 ④ ズイコ *zikho*
 ⑤ グジイ *gudʒi*
 ⑥ ルヴウ *luvu*

- (2) 白イ ① プピ *phupi*
 ② サマ *ʂama*
 ③ アチ *açi*
 ④ アディ *adi*
 ⑤ マヘ *mahe*
 ⑥ アビエ *abie*
 ⑦ ズイカ *dzikha*
 ⑧ ズイグ *dzingv*
 ⑨ ムチ *muçi*
 ⑩ アズ *adzuz*
 ⑪ オム *om*
 ⑫ アル *alu*

- (3) 奴隷 ① ズインズィ *dzindʒi*
 ② アコ *akha*
 ③ アク *akhv*
 ④ ザサ *dʒasa*

こうした階級差によって、住まいも相応の格差をもつものと思われるが、短い調査期間に対象家屋がどのカーストに属すのかを聞きだすのは困難であり、住まいの序列性を確認するにはいたらなかった。

3-2. 跑馬坪の集落と住まい

(1) 集落

跑馬坪大二壩村は、永勝から寧蒗にいたる幹線道路沿いに位置する。東南に急峻な大拉巴山がそびえ、その裾野から幹道にまで点々と家屋が散在するが、中央を流れる西橋河によって、集落は大きく南北に二分されている。大二壩村は、解放後の1950年にできたイ族の村で、現在は43戸・186人が住む。

散在する住居のまわりには、ジャガイモ、トウモロコシ、ニンニク、タバコ、四季豆などの畑がひろがる。主食となる燕麦は、やや村から離れた畑で作られていた。屋敷地や畑は、柵でかこまれている。山と河が集落や畑と融合した印象的な田園風景がみられる。

(2) 住居

住居は、柵にかこまれた敷地内に、主屋のほか若干の付属舎が点在する外庭型の配置をとるものが多い。開放中庭型と表現すべき配置をもつ住まいもある。

この村に大工はいない。家屋は、村人が自ら建てるといふ。住居となる建築には、掘立柱式棟持柱構造の素朴な建物、累木式壁構造の建物、そして少数だが穿闘式構法・版築壁の漢化した建物の3種類が存在する。それぞ

チヨ *ɲumodetɕo* とよんで家人の座、右をカラデチヨ *kaladetɕo* とよんで客人の座とする。

以上のような2方向の分節によって、炉を中核とする空間は大きく4つの領域に分けられ、それぞれの領域にふさわしい人物が着座するわけである。ただ、この場合、注意したいのは、その時あつまった人々のカーストや年齢・性などの諸要素によって、着座位置が相対的に変化することであろう。たとえば、血縁関係のある者しかいない場合は、そのなかの最年長者がカタの中央に着座するが、土司や黒イなどの上層階級が客として訪れたときには、その来賓がカタの中央に着座し、身内の最年長者はニューモデチヨのカタ側に座ることになる。また、「親戚」はその場の状況に応じて、ニューモデチヨの側に座る場合もあれば、カラデチヨの側に座る場合もあるという。

以上みたように、ガー ज्याの空間的中心は炉であるが、炉にも2つのタイプがみられた。ひとつは弓なりにカーブした石を120°ごとに配したいわゆる〈三石灶〉で、イ語ではこれをカーラ *kar* とよぶ。南北棟主屋のガー ज्याの炉はこの古風なカーラである。一方、東西棟主屋では、灰の上に鉄製の五徳 [シャカ *ɕaka*] を置く炉で、こちらのほうが新しいタイプとみなせよう。

さて、ガー ज्याの脇室のうち、ニューモデチヨ (家人座) 側のハクは長男夫妻の寝室、カラデチヨ (客人座) 側のカパは倉庫とされ、客用ベッドも置かれていた。東西棟の主屋は、ズォヘ *dzohə* という。1958年に、母親の亡夫がつくった。棟持柱式の素朴な建物で、南北の側柱と軒柱の数・位置がそろわず、桁は通すが梁をわたしていない。屋根は板葺で、棟は籐のアンペラでおさえる。外壁も籐製アンペラの張付けで、腰部分は交互に組んだへぎ板を立てかけている。平面構成およびガー ज्याの空間分節は、南北棟とまったく同じである。ハクの寝台に母、ガー ज्याの土間には残りの兄弟5人が籐のアンペラを敷いて寝る。

5棟の家畜舎は、切妻あるいは片流れ板葺屋根の累木式建築で、北側の2棟を豚舎 [ヴォホ *voxo*]、北西隅の1棟を牛舎 [ロホ *lɔxo*]、西側の2棟を羊舎 [ヨホ *joxo*] とする。

3-3. 牦牛坪の集落と住まい

(1) 集落

牦牛坪は、標高3300mの高山に集落を構える。今回調査したなかでは、最も海拔高度の高い村落である。高山に立地してはいるが、緩やかにうねる高原状の地形に集落は展開しており、行政的には紅星自然村、東風自然村、新村の3村からなる。調査したのは紅星自然村で、現在、65戸・306人が住む。

斜面の頂点に広場があり、この広場から放射線状に道

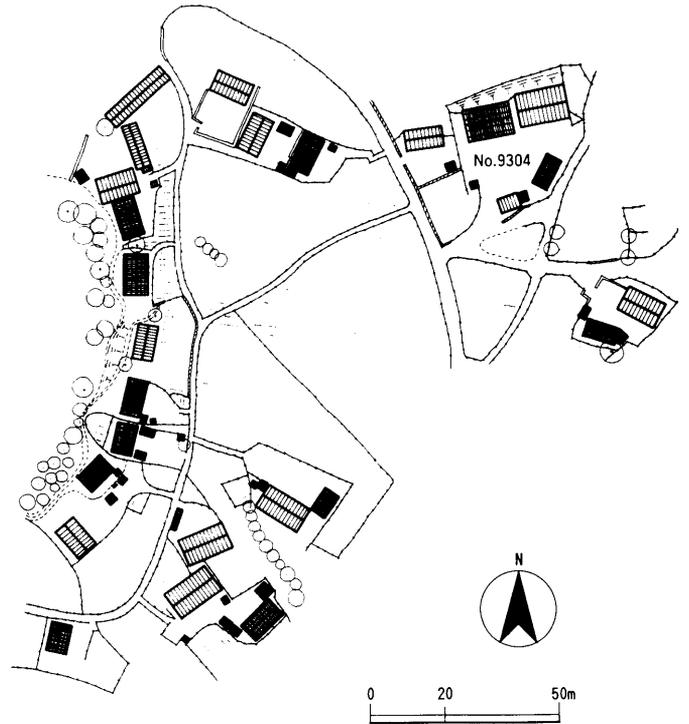


図12 牦牛坪集落の家屋配置 (屋根伏) 図 1/2,000

がのびている。古くからの集落は南下がりの緩やかな斜面の道沿いに線状に展開するが、その他にも2~3戸でまとまる住居群が散在する。畑や屋敷地は木柵でこまめ、畑ではジャガイモ、ニンニク、燕麦、蕎麦などを栽培していた。

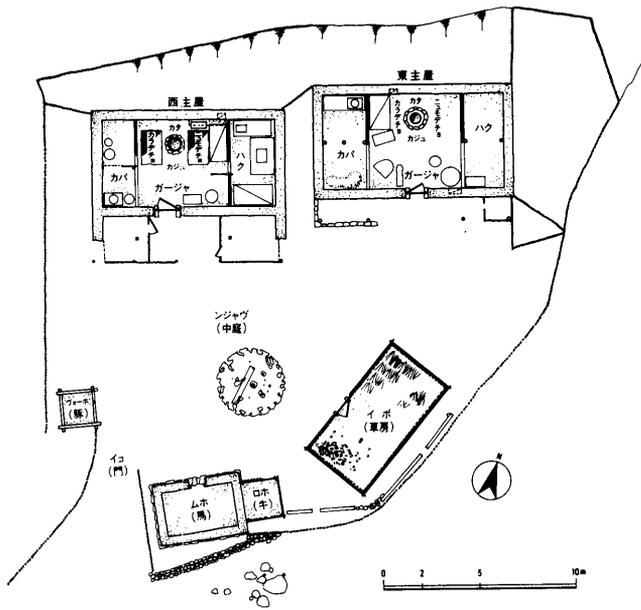
(2) 住居

住居 [クイ *iku*] は屋敷地を柵でこまめ、前庭型もしくは開放中庭型の配置をとる。主屋を中心に小規模な家畜舎が数棟付属するのが一般的だが、屋敷によっては複数の主屋をもつものもある。主屋とする建築は、その大多数が版築壁をもち、屋根は切妻の瓦葺あるいは板葺とする。このほかにも、少数ながら累木式建築や、掘立柱の素朴な建物もみられた。

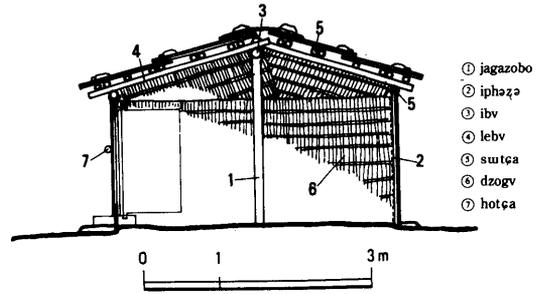
No.9304 アディン家 アディン (阿丁) 家は53歳の夫婦を筆頭に、長男夫婦とその子供4人、次男夫婦とその子供1人、三男の計12人から構成される。ジャツォ家と同じく白イだが、やはりその下位カーストは確認できていない。屋敷は、中庭 [ンジャヴ *ndzavw*] に南面して主屋が2棟並列し、東南に干草倉庫、南に馬厩、西南に小さな豚舎が配されている。

2棟並ぶ主屋は、一部に柱の補強がみられるものの、基本としては版築壁の壁立ち構造で、小屋組にキングポスト・トラスを採用した新型の家屋である。ただし、建設年代にはおよそ30年の開きがあり、西主屋は1964年に父親が建造したもので板葺、東主屋は1983年に長男が建造したもので瓦葺とする。

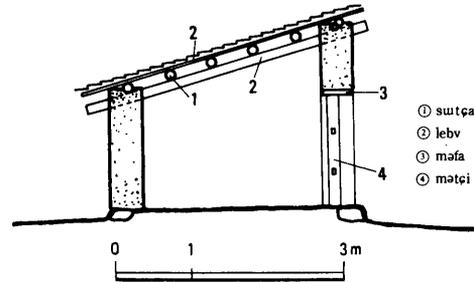
平面はいずれもジャツォ家と同じ平入り3室構成で、



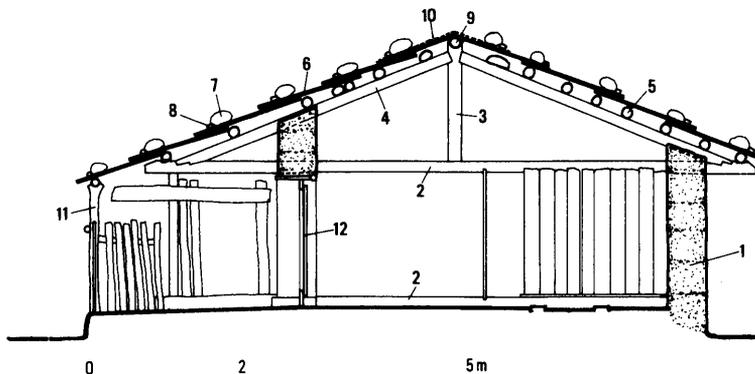
平面図 1/400



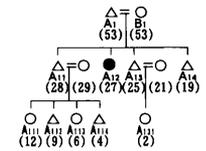
棟持柱家屋断面図 1/100



馬厩断面図 1/100



主屋断面図 1/100



世帯構成図

図13 アディン家 (No. 9304) の実測図

前面軒下を吹放ちとする。ただし、中央室の入口から奥にむかって右側をニューモデチョ (家人側)、左をカラデチョ (客人側) とし、脇室も右室をハク、左室をカパとする。つまり、ジャツァ家とは相対方位が反転してしまっているのである。おそらく、左右どちらを家人側 (あるいは客人側) にするのかは任意であり、むしろニューモデチョとハク、カラデチョとカパの結びつきのほうが重要と思われる。なお、古い西主屋には老夫婦と三男 (未婚)、新しい東主屋には長男一家と次男一家が寝ている。

つぎに部材呼称についてものべておく。構造壁となる版築壁はツァイエ tsaje という。地覆およびトラスの陸梁、すなわち梁行方向の水平材は、いずれもエチョ etcoとよんで細かい呼称の区別がない。トラスの棟束はヤガゾボ jagazobo、斜材はレブ lebv という。母屋桁の呼称はスーチャ sutça だが、これは累木構造の横木を表現する語彙でもある。棟木はインズ indzu、母屋桁・棟木の上に直接の板葺の葺板はピエ phie、その重ね合せ部分をおさえる石はヤザル jazar、石をとめる横棧はピツ phitsw、

棟を覆うアンペラの材はイブポ ibvpho という。このほかでは、軒の柱がンガイェゾブ ngatiezobv、中央室の入口がヴァハ vaha とよばれる。

東南の干草倉庫はイボ ibo という。ジャツォ家の東西棟主屋と同じ棟持柱式の素朴な建物で、建築年代は1988年と新しいが、村人によれば、昔は皆このような建物に住んでいたという。この建物についても、構造を説明しながら、部材呼称を示しておきたい。棟持柱は、主屋の棟束と同じヤガゾボという呼称が与えられている。側柱はイボゾ iphəzə といい、東西の列で柱の数・位置がそろわない。この柱上に桁を通すが、やはり梁はわたさない。桁は垂木上の木舞とともにスーチャとよばれるが、既述のように、この呼称はトラス上の母屋桁や累木壁の横木を表現する言葉でもある。この建物では、棟木をイブ ibv とよぶ。軒桁と棟木の上にわたす垂木はレブで、これはトラスの斜材と同じ呼称である。アンペラの壁材はゾグ dzogv といい、それを外側からとめる横材はホチャ hotça という。

主屋の対面には、版築壁構造・片流れ瓦屋根の馬厩 [ムホ

muxo] が置かれ、その東妻壁には粗末な造りの小さな牛舎 [m̄l̄əxo] も付属する。1986年に建設された馬厩は、北側の高い壁から南側の低い壁に登り梁状の斜材をわたして、その上に母屋桁を数本のせ、さらに垂木をかけて瓦を直接葺く構造をもつ。母屋桁を挟む斜材と垂木は、いずれも呼称がレブで共通しており、母屋桁には、累木壁の横木と同じスーチャという呼称が与えられている。

敷地西南の小規模な豚舎 [v̄ə-h̄ə voxo] は、累木式構造・片流れ板葺屋根の素朴な建築である。既述のように、このような累木壁構造の建物、あるいはその壁を構成する横木は、いずれもスーチャとよばれる。

以上みたように、この村で用いられている建築語彙には、複数の部材で同一の呼称を共有するものが少なくない。たとえば、棟持柱とトラスの棟束はヤガゾボ、登り梁風の斜材と垂木はレブ、陸梁や地覆などの梁行方向の水平材はエチョ、母屋桁・木舞などの桁行方向の水平材および累木壁の横木はスーチャとよばれている。このようなルーズな呼称データがえられたのは、情報提供者が一般の居住者であったからだろうが、大二地村と同じく、この村にも専門分業化した大工がいない。このため、体系化された呼称データが採集できなかったのである。しかし、居住者自身が建設者でもあるという事実が、この村の建築生産の本質であるともいえよう。

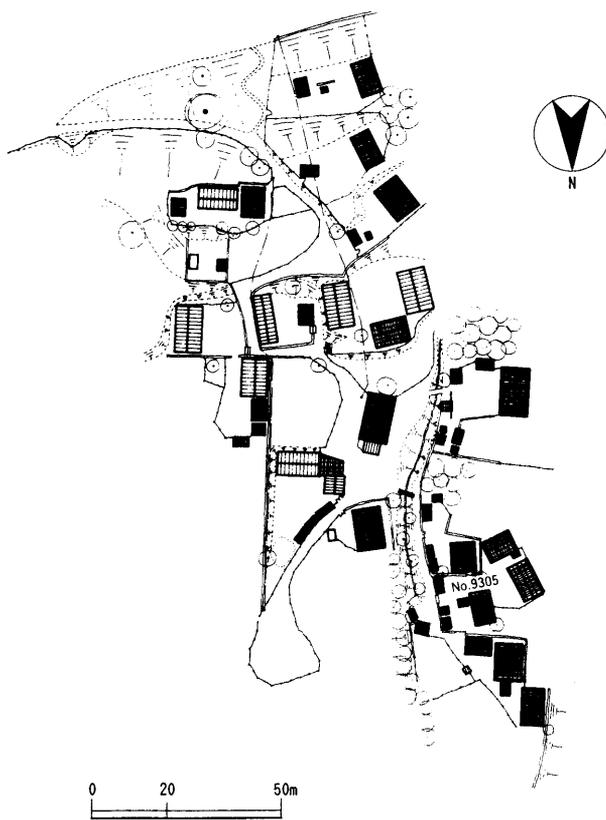


図14 樹囉河村の家屋配置(屋根伏)図 1/2,000

3-4. 大二地村の集落と住まい

(1) 集落

大二地行政村の樹囉河自然村は、寧蒗の東の高地(標高2300m)に集落を構え、現在は22戸・94人が住む。村人の伝承によれば、以前は昆明付近を居地としていたが、漢族に追われて四川にのがれ、200年前にこの地に移り住んだという。集落は山の中腹の北下りの斜面に展開している。道は住居の間をまがりくねっており、集落中ほどの村長宅の横には、小さな広場状のスペースもできている。水は、集落の上の方から木製の樋を使って村内へひいている。

(2) 住居

屋敷は木柵や松葉葺の土堀でかまれており、そのなかに主屋と家畜舎が配されている。複数の主屋をもつ屋敷もある。主屋・付属舎いずれも、累木式壁構造の平屋建築が圧倒的に多いが、版築壁の主屋が1棟、また2階建累木式構造の主屋(村長宅)も1棟ある。

No.9305 チェ家 音声の類似から「陳」という漢式の姓をもつイ族の一家で、白イのなかの第7カースト [dzikha] に属する。屋敷地のなかには3棟の主屋が建っている(図14の家屋配置図を参照)。門に近い東側の主屋には、66歳になる母親と3男が住む。この主屋は1980年に亡夫がつくった。この主屋の裏側にある西側の主屋は

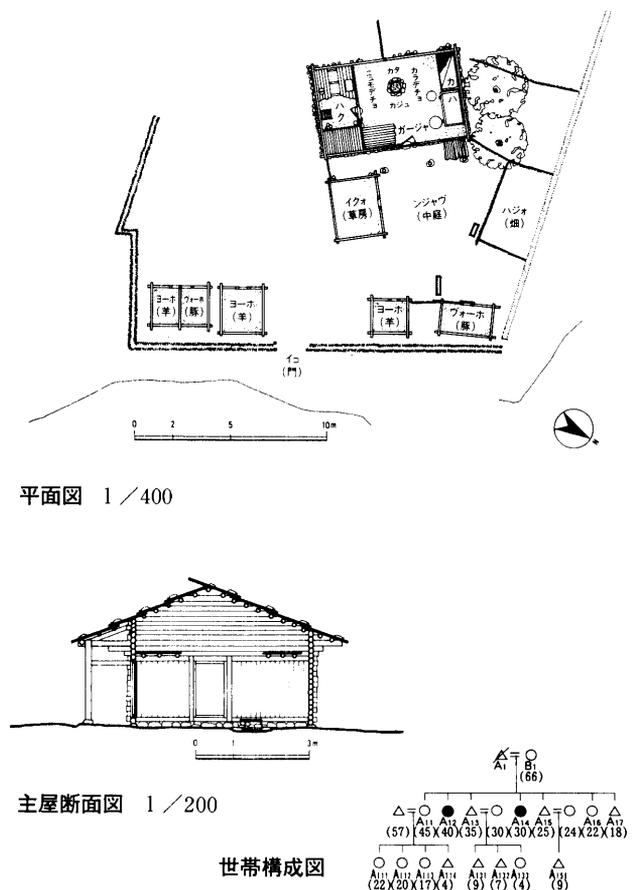


図15 チェ家 (No. 9305) の実測図

1992年に大二地行政村の木匠（大工）が建てたばかりの新屋で、4男(25歳)が息子(4歳)とともに住む（妻とは離婚）が、経済的には母親から独立しておらず、東主屋の炉を共有し、そこで食事をとっている。一方、南西寄りに建つもう1棟の主屋は、東主屋と同じく1980年に建造されたものだが、長女(45歳)の嫁いだ「馬」家の主屋で、こちらは経済的にも完全に独立している。このほか、長男(35歳)は村長で、村内の別の敷地に住まいを構え、次女(40歳)と三女(30歳)は他の村に嫁いでいる。

調査したのは、母の住む東主屋とその前方に並ぶ付属舎である。いずれも累木式構造の建物だが、主屋とそれに隣接する物置は板葺、その他の家畜舎は板のほか枯れ枝も葺材として屋根をつくる。

1980年に建造された東主屋は、村で最も古い建物の1つで、たしかに平面・構造とも古式を残す実例といえようである。平面は前2例と異なり、厳密には3室構成ではない。間仕切りが明瞭なのは、炉のあるガージャとニューモデチョ側の寝室ハクとの間だけで、この意味では2室構成というべきであろう。つまり、平面的にはガージャとカラデチョ側のカパが未分化なのだが、その間仕切りがあるべき位置の小屋組を累木壁としており、ガージャとカパの境界を実感することはできる。そして、カパの側には穀物貯蔵の櫃と客用の寝台を置いているのである。家族の寝室ハクは、中央を土間、その両脇を板張り床とする。東側の板床部分を母親の寝場所とし、3男はその屋根裏で寝るという。

構法的な特徴は、妻壁だけでなく、中間内部の小屋組も累木式とするところで、既述のように、それがガージャとカパの境界を表示することも興味深い。

4. 要約と考察

以上みたように、今年度の第4次調査は、かなり質の高いデータを私たちにもたらしてくれた。最後に、その成果を社会的・空間的側面と建築的側面の両方から検討しておきたい。

4-1. 住居・集落の社会的・空間的考察

(1) 落水村の社会的変容と居住空間

落水村での調査は、きわめて刺激的だった。アチュ関係を軸とする下村のモソ社会と、一夫一妻制を軸とする上村のプミ社会が、相互に依存関係を維持しながら変容してきた状況を確認しつつ、住居と集落に関する生々しいデータがえられたからである。

社会変容の主導権を握っているのは、あきらかに古参の土着集団、すなわちモソ人の居住する下村のほうである。湖畔に集落を形成するという立地条件だけでも、生業経済・観光資源活用にとって有利な立場にあり、モソ人がプミ族よりも早くから瀘沽湖周辺を開発してきたこ

とを示唆している。一方、新参者である上村のプミ族集団は、漁労や観光客用の船漕ぎなどの生業経済活動において、上村のモソ人に雇用される従属的な立場にたたされている。

この結果、言語・文化の多方面において、プミ族の「モソ化」が顕著に進行してきたものと思われる。その傾向は住宅の建築形式にも著しく、平面・構造・細部のいずれもが、プミ族によるモソ住宅の模倣として解釈しうるだろう（注11参照）。建築という物質文化に限定するならば、瀘沽湖畔のプミとモソは、完全に同化を完了した段階にあるといっても過言ではないかもしれない（一部の部材呼称のみ差異がある）。

一方、居住様式についても、とくにプミ族側に大きな変容が生じてきたものと推定される。一般にプミ族の社会は父系原理に基づくものといわれるが、上村では一夫一妻を原則としながらも、家長は女の長老で下村その他から夫を迎える婿入り婚を軸とした母系の社会がすでに成立しているようにみえた。また、下村のモソ社会においても、上村のプミ族男性をアチュとした場合、プミ族の認識としては当然「一夫一妻」が頭にあるわけだから、離別を前提とする妻問関係から、永続性をともなう婿取り婚への変化がうながされることになるはずである。また、第2章でも説明したように、老齢の男性アチュが女性側の家を常宿にし、さらに死に場所とする傾向もみられ、今まさにアチュ関係が解体しつつある状況を確認することができた。

上村のプミ社会の場合、「モソ化」という概念でその文化変容のプロセスの大枠を説明しうるだろうが、下村のモソ社会では、また別の変化も生じはじめている。それは「漢化」と「現代化」の動きである。まず、ラマ経堂が累木式構造にチベット建築風の意匠を施した平屋の建物から、穿闘式構法・版築壁・瓦葺の漢式2階建建築にとって代われつつある。また、瀘沽湖の観光開発にもなって、これと同型の建物が民宿専用もしくは民宿兼経堂として、屋敷地の奥に新築される傾向が近年とみに著しい。さらには、国家による観光開発プロジェクトとして、湖畔道路の建設も計画されており、これが実現すると累木式構造の家畜舎が撤去され、湖畔の風景と環境に大きな変化をもたらすだろう。そして、下村における「漢化」と「現代化」の波は、いつしかモソからプミへとひろがって、上村の環境変化にも影響をおよぼすことだろう。

(2) 炉をめぐる空間分節と着座規範

イ族とナシ族（モソ人）が言語的に近縁な関係にあって、民族の起源としては同源の可能性があることを前報で指摘しておいた。両者が同源であるとするならば、住居空間や建築技術にも、類似性や系譜関係がみとめられるはずである。建築そのものについては次節でふれるの

で、ここでは住まいの最も中核的位置を占める炉のまわりの空間構造を比較してみたい。

イ族の住まいでは、主屋の中央室ガージャの奥にある炉が空間の中心的存在である。この炉を境界として、前後方向では奥の上座カタと入口側の下座カジュ、左右方向では客人側のカラデチョと家人側のニュモデチョに領域が区分される。すなわち、直交する2つの二項対立的空間分節が、炉を中心に重層し、全体では4つの着座領域が形成されていることになる。

一方、モソ住居の場合、主室の空間構造はもっと複雑となるが、板間に切られた「下の炉」が中心となり、正面の火神ザバラにむかって右の「男の柱」側を客人・男のガクワ（着座領域）、左の「女の柱」側を家人・女のガクワとする点は、イ族のカラデチョ／ニュモデチョの分節原理によく対応している。一方、火神ザバラを正面とみた場合、イ族のカタ／カジュに明快に対応するような、前後方向の分節原理はみあたらない。しかし、「下の炉」の北縁に接する敷居を境にして、その北（手前）側の板間と土間を領域的に一括し、ヒティマとよぶ点を見落としてはならないだろう。

すなわち、前後方向の空間分節の境界が、板間と土間を分ける「男の柱」と「女の柱」の筋ではなく、「下の炉」の縁を通る敷居であるということは、ヒティマが炉もしくはザバラに対して、劣位の意味を賦与された領域であることを暗示している^[14]。もしこの推定が正しいとするならば、ザバラ／ヒティマは上座／下座の二項対立的意味関係を有することになり、イ族のカタ／カジュの関係に近似することになる。そして、全体としてみても、

[前後方向] [左右方向]

(+) ザバラ＝カタ 男のガクワ＝カラデチョ

(-) ヒティマ＝カジュ 女のガクワ＝ニュモデチョ

という対応関係が抽出されるのである。

さて、前報でくわしくのべたように、イ族やモソ人の祖先たちは、古代の西域に起源する「羌」系の古遊牧民と密接な系譜関係をもつという見解が、雲南民族史学では有力になってきている。とすれば、このような内部空間の分節原理にしても、西域や内蒙古の遊牧民が使うテント住居の内部空間分節との比較が重要な意味をもつことになるだろう。しかしながら、これについては、今後の課題としたい。

4-2. 西北雲南の建築的系譜

(1) 棟持柱建物の位置づけ

前報では、西北雲南の蔵緬語族に共有される住居建築の構造的特徴は、漢化した住宅をのぞくと、「組積構造」の概念で一括できるとのべたが、今回の調査により、あらたに別種の建築類型を追加する必要のあること

が判明した。それは、白イの屋敷内にみられた棟持柱構造の家屋である。この家屋類型の構造的特徴は、① 棟持柱を用い、② 左右の側柱筋で柱の位置・数がそろわず、③ 梁をわたさないことである。注意したいのは、このタイプの家屋が付属舎としてだけでなく、れっきとした主屋として用いられていること（No.9303）、そして、白イの村民が昔は皆このような家屋に住んでいたとのべたこと（No.9304）である。つまり、白イのような低カーストのイ族にとっては、この種の棟持柱式の建物がより伝統的な住居形式であって、累木式や版築式の壁構造建物は、上層階級から影響をうけた比較的新しいタイプの住居ということになるのだろう。

さて、建築構造の系譜について、筆者は四川省の渡口リス（粟粟）族に伝わる「千脚落地」式の住居^[15]が、この種の棟持柱式建物の祖型に位置づけうるのではないかと考えている。渡口のリス族は、解放前まで穴居や洞窟を住まいとする「野人」的生活を続けていたといい、近年でも切妻屋根を地面にかぶせただけの家屋、すなわち「千脚落地」式の建物に住んでいるのである。この「千脚落地」式建物の切妻屋根を棟持柱と側柱でもちあげれば、白イの棟持柱式建築に発展する。この系譜上に展開する建築形式は、西北雲南周辺の蔵緬語族のうち、最下層の人々に継承されてきたのではなかろうか。

(2) 累木式建築構法の系譜

ナシ族やモソ人をふくむ西北雲南の蔵緬語族（とくにイ語支の集団）が、甘粛・青海方面に起源する「羌」系の古代遊牧民を祖先とすること、あるいは少なくともその民族形成に「羌」の文化が大きく関与していることは、すでに前報からくりかえしのべてきた。この民族史的背景に注目した稲葉和也^[15]は、石寨山青銅器文化の動物意匠にスキタイ系の北方草原遊牧民文化の影響が濃厚にみとめられることを指摘した白鳥芳郎の論考^[16]を参考に、次のようにのべている。

「雲南省西北部のごく限られた地域に残存する少数民族の校倉造の建築は、（略）黄土高原地帯に居住していた氐羌族のもたらしたものであり、その伝統が今日なを続いていると考えられよう。秦の統一以前、黄土高原地帯には、まだゆたかな樹林があったと言われるが、氐羌族はそれに依存していたのである。」

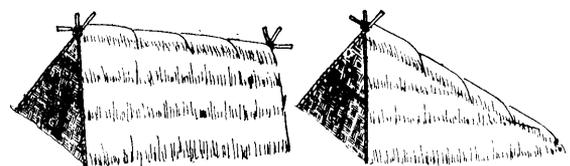


図16 渡口リス族の「千脚落地」式住居 [注4文献より]

筆者は基本的には稲葉説に賛同したいと思うが、同時に以下のような疑問を感じている。

① まず、ほんとうに「秦の統一以前、黄土高原地帯には、まだゆたかな樹林があり」、その材木を活用した累木式の家屋が存在したのか、という疑念である。これについては、今のところ考古学的に有効な家屋址データがみつかっていないので、少なくとも累木式構法の家屋の起源地を「黄土高原地帯」ということはできないだろう。むしろ、新石器～銅石併用時代における^{たてある}竪穴式住居や「木骨泥牆」式壁構造の平地式住居が、中原・西域と雲南北部とに共通し、その伝達者を「羌」系民族とみる李昆声の見解¹¹⁷⁾に筆者は賛同したい。

② スキタイ文化の問題にも、注意を要する。周知のように、スキタイとは紀元前7～3世紀に、黒海北岸の草原地帯に跋扈した^{はっこ}騎馬遊牧民であり、同時代に北方ユーラシアの周辺地域に展開した遊牧民文化をふくめて「スキタイ文化」とよぶにしても、それは「羌」もしくは「羌文化」と同一ではない。関係する漢籍史料を綿密かつ総合的に検証した白鳥芳郎は、「石寨山文化→夔蛮→麋些→昆明→羌族→烏孫(昆彌)→匈奴→月氏→大月氏→塞(スキタイ)というような諸種族の接触交流」を考慮し、「スキタイ文化をとともなう北アジア遊牧民民族が西南中国まで移住する歴史的経緯」を説いた¹¹⁸⁾。たしかに、このような文化交流と民族移動があって、独特の動物意匠に代表されるスキタイ系文化要素が石寨山にまで波及したのであろう。しかし、その文化要素が、白鳥のいうように、「羌」の文化に吸収されつつ伝達されたものなのか、それとも、ある独自の集団によってもたらされたものなのかは、なお問題を残す。張増祺は後者の立場をとる。『漢書』西域伝にみえる「塞」こそがスキタイであり、この一群が南遷して雲南に移住し、「崙」もしくは「叟」とよばれるようになったというのである¹¹⁹⁾。いずれにせよ、西方の「スキタイ」系要素と東方の「羌」系要素とは、同じ遊牧民文化であるとはいえ、ほんらい区別すべきものであり、累木式構法の家屋についても、どちらの文化複合としてとらえるのか、慎重を要する。

③ 太田邦夫は、丸太組や井籠組技法による家屋の世界的分布を示す¹²⁰⁾とともに、家屋址や木槨墳などの出土データを再構成しながら、ユーラシア大陸における累木式構法の起源と^{てんぱ}伝播を推定している¹²¹⁾。とくに注目したのは、丸太組の構法が紀元前18世紀ころからヴォルガ川下流域や西シベリアの木槨墳に存在したことである。太田によれば、

「それが西進して紀元前12～11世紀に黒海北岸のドニエプルとドニエスルの流域に達し、紀元前8世紀頃まで続いたあと、後続部隊であるスキタイ人の伝統に吸収されていく」

という。さらに、シベリアからアムール川流域、さらに

アラスカにまでも分布する極東方面の累木式壁構造にも、とうぜん太田は言及しているが、いかんせん、この東方への普及の担い手については明言していない。しかしながら、「スキタイ人の伝統に吸収され」た累木式構法の技術が、スキタイ人の活動とともに、その活動の範囲ばかりか、周辺の諸地域にまでも波及した可能性は否定できないだろう。とすれば、その波が、スキタイ系動物意匠などとともに、雲南にまでおよんだとしても、けっしておかしくないのである。

以上から、筆者なりの解釈を示しておきたい。いささか早計かもしれないが、筆者は現在つぎのように推定している。すなわち、西北雲南に特有な建築文化のうち、新石器～銅石併用時代の竪穴住居址や「木骨泥牆」式の平地住居址は、中原方面と関係の深い「羌」系の要素とみなされるが、前漢から現代にまで存続してきた累木式構法の家屋は、「羌」文化そのものの要素というよりも、むしろ「スキタイ」系の要素とみなすべきではないか。ただし、この「スキタイ」系の建築技術が、「羌」に吸収されたかたちで伝来したのか、スキタイ人そのものがもたらしたのかについては、なお問題を残しており、今後の検討課題としておこう。

《注》

- 1) 前報とは、昨年度の年報所載の梗概をさす(西南中国民族建築研究会「雲南省ナシ族母系社会の居住様式と建築技術に関する調査と研究(1)」『住宅総合研究財団研究年報』No.19, 1992年)。このほか、昨年度調査の成果として、浅川「雲南省永寧モソ人の住まい―母系社会の居住様式と累木式建築構法に関するフィールド・ノート―」(『創立40周年記念 文化財論叢II』奈良国立文化財研究所、近刊)があり、この論文は『住まいの民族建築学―江南漢族と華南少数民族の住居論―』(建築資料研究社、1994年)にも再録されている。
- 2) 落水村における住居番号の表記原則は、以下のとおりである。湖畔第1列の26戸を、西から東へむかってA-1→X-1とし、第2列および第3列の住居については、その前方に位置する第1列住居と同じアルファベットをあてて、第2列なら-2、第3列なら-3をその後につける。この場合、たとえばT-1とT-2は、たんに配列関係を示すだけで、血縁関係とは無縁であることに注意されたい。
- 3) 船には一木くり抜きの丸木船と合板製の大型船の両種があったが、呼称はいずれもzuiguであった。
- 4) 落水村では、死人がでた場合、葬儀の日まで、主屋後室に土のマウンドをつくって死体を覆い、仮殯の状態を続ける。その後、ラマが吉日を選定して火葬の日取りをきめる。火葬の日、早朝に死体を輿状の棺にうつし、パレードを組んで集落西方の山裾へむかう。パレードでは、シンバルと旗をもつ男たちが白馬と棺を先導し、その後方に泣き女がつづく。棺が山裾に到着すると、すでにラマたちは読経を始めており、その前方には薪を井桁状に2mほど組みあげている。この上に棺をのせ、火葬するのである。
- 5) 親族呼称については、ごく一部しか採集していないが、以下に記しておく。

- ① 子が母をとぶとき=ama
- ② 子が母の姉妹をよぶとき=emi
- ③ 子が母の弟をよぶとき=ev tsi
- ④ 子が母の兄をよぶとき=ev
- ⑤ 子が祖父母を呼ぶとき=edzə

6) 落水村での調査では、「愛人」を意味する語彙が確認できなかった。これは調査対象のナイーブさによるためだろうが、ここでは

これまでの調査報告等にしがたい、「アチュ」という用語をそのまま借用する。国際音標文字を併記しないのは、以上の理由による。

7) したがって、あるモソ人の女性に対して、「あなたの夫はどの村の人?」とか、「あなたの男友達はどこで眠るの?」というような質問をするのはタブーとされる。このようなぶしつけな質問をしたなら、極端な場合には、相手の女性はそっぽをむいて、口をきいてもらえなくなることさえある。じっさい、私たちの調査隊の某男性委員も、世帯調査の初期段階で、この種の失敗をおかしてしまった。そこで、アチュに関する聞き取り調査は、王・高岡の両女性委員にまかせることになった。この役割分担が、効を奏したようである。

8) 家族構成図における▼については、はっきり回答されたものではないので、表記すべきではないかもしれない。ただ、ヒアリング時の印象として、女性が個室をもつきっかけは、アチュができたかどうかに関係しているように思われたため、13歳以上の個室をもつ女性と、子供のいる35歳未満の女性についてはアチュがいる確率が高いと判断し、この記号(▼)を用いることにした。なお、子供がいる女性の年齢を35歳未満で区切ったのは、そのくらいの年齢になると、アチュがいる場合には比較的素直に「いる」と答えてくれる人が多いのと、30代後半になるとなかなか男性アチュがきてくれないというコメントがあったためである。

9) 昨年度は、クア家[M-1]の調査もおこなっている(前報 p.130~131)。また、建築単体や細部に関しては、本年度もさらにいくつかの住居で実測調査をおこなったが、その報告は割愛する。

10) この葬儀の様子が、注4)の描写である。

11) 一般的なプミ族の住居は、主屋や2階建の家屋から構成される中庭式だが、主屋の平面は入口右手を板間、左手を土間とし、その境界に1本の柱(擎天柱)のみをたてる(嚴汝嫻・王樹五『普米族簡史』雲南人民出版社、1988年)。ここに、落水村との差異をみとめることができよう。

12) 後述するように、大二地行政村樹囉河自然村のイ族はもともと昆明付近に住んでいて、四川まわりで小涼山に移住してきたという伝承も持っている。だいそれた邪推かもしれないが、石寨山青銅器文化期の奴隸社会との系譜関係が気になるところである。

13) 「下の炉」まわりの着座位置については、嚴汝嫻・宋兆麟『永寧納西族母系制』(雲南人民出版社、1983年)の第7章「母系制在住俗上の反映」にもくわしい記載がある。モソの社会では「右」が「左」に優越し、ザバラを背にして前方の土間領域をみた場合の「右」が女、「左」が男の着座位置となり、女の着座領域にも序列があって、祭壇に近いほうが家長で、以下、世代・年齢にしたがって、祭壇から遠い位置に座するという。この記載からも、ザバラに近いほうが「上座」、ザバラから遠いほうが「下座」であることがうかがわれよう。

14) 陳顕賢「渡口民族建築調査」(中国科学院中華古建築研究社編『中華古建築』中国科学技術出版社、1990年)

15) 稲葉和也「雲南省にみられる校倉造の源流について」(『日本建築学会大会学術講演梗概集』F、1990年)

16) 白鳥芳郎「石寨山文化にみられるスキタイ系文化の影響 — 種族=民族の交流とその経路 —」(『華南文化史研究』六興出版、1980年)。

17) 李昆声「論雲南與黃河流域新石器時代文化的關係」(『史前研究』1985年第1期)

18) 注16) 論文

19) 張增祺「再論雲南青銅時代的“斯基泰文化”影響及其傳播者」(『雲南文物』26、1989年)。同「“驚人” — 雲南古代的斯基泰民族 —」(『中国西南民族考古』雲南人民出版社、1990年)。

20) 太田邦夫「世界の木造構法の分布とその技術史的背景」(『新住宅普及会住宅建築研究所報』No.10 1983年)

21) 太田邦夫「丸太組の源流を求めて — ユーラシア大陸における木壁組積造の起源 —」(『ログハウスのすすめ』建築資料研究社、1989年)

〈研究組織〉

主査	浅川滋男	奈良国立文化財研究所主任研究官 (建築史)
委員	田中 淡	京都大学人文科学研究所助教授 (建築史)
〃	江口一久	国立民族学博物館助教授 (民族言語学)
〃	溝口正人	名古屋大学助手 (建築史・建築計画)
〃	杉本和樹	西大寺フォト(カメラマン)
〃	高岡えり子	東京理科大学助手(建築計画)
〃	王 恵君	横浜国立大学大学院博士課程 (建築史)
〃	何 耀華	雲南省社会科学院院長(民族学)
〃	何 大勇	雲南大学歴史系助手(雲南民族史)